

「黒い雨」管見

寺 横 武 夫

「黒い雨」の世界は、主人公夫婦が養女のようにつくしんでいた姪のもとへ「勿体ないほど喜ばしい縁談ばなしが持ちあがっている」(一) 時点で始発する。ときに、「終戦後四年五箇月目のこと」(傍点引用者、以下同様)であった。ところが、この日時は、「姪の結婚」と表題された初出の『新潮』誌上にみえるもので、のち単行書類へ再録されるにあたっては改訂されてゆく。すなわち、新潮社版単行書(昭41・10)、『新潮日本文学(井伏鱒二集)』(昭45・1)、新潮文庫(昭45・6)、さらに筑摩版『現代日本文学大系(井伏鱒二集)』(昭45・8)などでは「終戦後四年十箇月目」に改められ、それが、いわば決定稿のおもむきになる。わずかに五箇月のくりさげだとはいえず、そのところをなぜ作者は改めなければならなかったのか。そうと改訂すべきどのような計算が働き、どのような必然性が感知されたのか。

もちろん、こうはいつでも、「黒い雨」では、右と別の部分にも筆の入れられた箇所がないのではない。そして、元来、補筆改竄はこの作家の常套でさえあるのだから、ここだけをとりたてて贅言するにもあたらぬようではある。しかしながら、この部分的改訂は、同時に作品全体の始発時の訂正をも意味するとなると、単なる、部分的な日時の訂正問題だけではすまされない。一歩をすすめていけば、作品を解くひとつのかぎがそこにひそんでいることを予感させるのである。ありていにいえば、この部分の改訂作業には、作品を書き終わった時点からする、作者の逆算が投射されているふしがある。以下、このころみに、作品を成立させている時間上の呼応関係を吟味することで、それをたしかめてみよう。

作品中へ挿入される話題が、原爆投下時点での酸鼻譚であり、後日における修羅場のさまであることは断わるまでもない。主人公間重松の「被爆日記」が、その主役をなっていて、昭和二十年八月六日を起点として十五日の終戦までにいたる、十日間の記録を主内容とする。

一方、そうした内容をもつ「被爆日記」を営々と「清書」していた重松の現時はどうだったのか。作品は、全般的にみて、時間上の記述が細部まで統一されているとはいいたい。だが、浄書作業に没頭している現時点に関して、明確な言及箇所は二点あるとみられる。ひとつは、なかほど、「姪の結婚」から「黒い雨」へ改題されたあたりにてでくる、尾道港住吉祭の「六月三十日」(九)という記述であり、他のひとつは、結末部近くにみえる「あと三日で八月六日だ」(十九)という重松のことばである。ともに、「終戦後四年」目はずである。

前者は、重松が、住吉祭の「燈籠ながしも見に行かないで清書」に熱中している時点である。すなおに読み進めてくれば、この「六月三十日」は、初回の、重松が姪の日記を浄書しだす日から数えての五日目(つまり、昭和二十五年六月三十日)に相当する。したがって、そこから浄書の始まる第一章の時点逆算すれば、その年の六月二十六日という日が浮んでくるのだが、始発の現時点をそのままに算定してみるとは無理のようだ。それは、「六月三十日」の住吉祭が登場してくるまでに、「芒種の日」とか「翌々日の虫供養の日」とかの記述があつて、その直後、「芒種と虫供養がすんで、十一日にはお田植祭、十四日には旧の菖浦の節句、十五日には河童祭、二十日には竹伐祭と祭が続く。」(七)と説明されているためである。これによれば、始発点の第一章から九章の「六月三十日」までには、ゆうに五日間以上の日時が経過していたことになって、始発時点である第一章の起点は、六月の月上旬、少なくとも六月八日以前までさかのぼってみなければならぬことになる。しかしながら、いまはこうした細部的な詮索は不要だろう。必要なのは、作品の前半部に相当する第九章までの現時点が、昭和二十五年六月上旬のある日から、「六月三十日」までのことになるといふ作品中の事実を以上によって確認しうることである。

重松の浄書作業は後半部へも続行されてゆく。「翌日(引用者注、昭25・7・1)も続いて『被爆日記』を清書した。」(十) こうして、あたかも日課のよう

に続けられる作業も、「もう七月だ」(十六)ということばを介入させて終局へ近づいてゆく(のちに、「八月中旬になると」(十七)という日時がみえるのは錯簡だろう)。そして、余すところわずか、「被爆日記」の八月十三日目を記述する重松は、「あと三日で新暦では八月六日の広島原爆追憶日、八月九日は長崎原爆追憶日となっている。『そうだ、あと三日だ。筆記を急がねばならぬ』と「翌日まわしで『被爆日記』の清書を仕上げた。」(十九)のであった。だとすれば、作品全体の結末部に相当する第十九章以下の現時点が、昭和二十五年八月三日前後であることは明瞭になるだろう。

少しく煩瑣なことにたち入りすぎた。ただ、以上によって、「黒い雨」の世界を成立させている現時点が、昭和二十五年六月上旬のあたりから八月初旬までの時日であることは判明してきた。これは、作品中の事実であって動かしがたいだろう。ところが、こうなると、全体の始発時点を、初出にあった「終戦後四年五箇月目」のままに放擲しておくのはいかにも不都合というものだ。それでは、始発時点が昭和二十五年一月を意味してしまうからである。気づけば即刻訂正しなくなるのも人情というものだ。わずかの差異だとはいえ、作者があわてふためいてこうした逆算を働かせたであろうことは想像にかたくない。はたせるかな、決定稿で改められた「終戦後四年十箇月目」とは、これまで試算してきた昭和二十五年六月時点を意味するのである。

ところで、このような日時の改訂問題は、一見するところ、へんたる失策であることかVと云ったふうの、一種のほほえましい軽拳と映らなくもない。しかし、そのようにつぶやく井伏文学の人物たちがつねにかなりこまっていたように、「黒い雨」の作者としてのつぎならぬ事態にたちいたったのは自認していたはずだろう。作者は、自己の犯した人失策Vを、作品を書ききついでいる途中で(おそらくは後半になったあたりで)発見してあわてふためき、書き終った時点からひそかに最初にたちもどって改めたのであるにちがいない。しかも、その一箇所たるや、全体と密接にかかわる意味での重要部分だとなれば、ここに透視できるのは、全体の脈絡を必死に照応させようとする作者の、作品統一への意志でなければならぬ。それは、同時に、作品構築の困難さをつぶやく作者の苦澁でもあるのだから、おそらくここにはなにかが起っていたにちがいないまい。

そういえば、途中で表題の改められた事件も想いあわされる。周知のように、

はじめこの作品は、昭和四十一年一月号から翌四十二年九月号までの『新潮』に都合二十一回にわたって連載された。初出では、初回から七回までが「姪の結婚」という表題をもち、八回から最終回の二十一回までが「黒い雨」と改題されてきた。決定稿とみられる現行のものでは、題名の称呼も「黒い雨」に統一され、章立ても二十章に縮少されているが、破格といえはかなり破格の経過ではある。

ともかく、なにかが起ったに相違ない。当面はそれを注視することで作品を解明してゆくことが要請されているようである。

二

物語りは、ふたつの部分のないあわせによってなりたっている。外側の枠組みには、「姪の結婚」という、いかにも日常的なことばで代表されるような虚構された現在時がある。内側には、現実の広島を一変させてしまったほどの「黒い雨」という異常世界があり、その酸鼻な修羅場を見聞しあるいた重松の、事実としての「被爆日記」が設定されている。A虚構Vを通してのA事実V、A日常VのなかでのA非日常V、A現在V時からのA過去V時——これら内外ふたつの交響が、イメージの累積・残像という錯覚によって一見ほどよい協和音をかなでたかに思えるのだが、しかし、もう少しくたくち入ってみれば、実はそこに小説としての変質が発生している事実にゆきあたらざるをえない。

以下、仔細を追ってみよう。まず、作品の冒頭部はつぎのように書きだされている。

この数年来、小島村の閑間重松は姪の矢須子のごとで心に負担を感じて来た。数年来でなくて、今後とも云い知れぬ負担を感じなければならないような気持であった。二重にも三重にも負目を引受けているようなものであった。(一)
小島村は、広島県東部の備後地方にある、中国地方のどこにもありそうな平凡な農村である。その在の旧家の当主・重松は、戦時中広島市内に居住して会社勤めをしていたものの、被爆の結果、身体をいとおって帰農した平凡な中年男である。ただ、サラリーマン時代には工場の事務職でも要職といつてよいほどの、少なくともそれに近い地位にいた。生活者としてもたいへん筆まめな性分らしく、坊主に代って被爆死体をほおむるに際しては、「四弘誓願」「般若心経」「白骨

の御文章」などの經典を筆記してきて数日で暗誦してしまうほどのインテリジェンスをそなえている。だが、生活から遊離した孤獨な知識人ではない。むしろいうならば、生活に密着したひかえめな土着人であり、職場でも村でも家庭でも、いつも具体的な人間関係のなかで自分の根をたしかにもっている人物である。そして、かれの周辺にはゆるやかな時間の流れがあり、確固たる生活のにおいがただよっていて、樋ツアだとか九郎治ツアンたち、さらにはまた丹下氏邸の人々や朽助やオタンたちが出てきても不思議のない、牧歌的とさえ形容できそうな日常のよい状況設定である。こうした地肌の、のどかで日常的な生活展開を追って、その間に、激しいいきどおりに満ちた、今世紀最大の異常な光景がせり出てくるという構造になっているのだが、それにしても書きだしの、姪に対する深い思いやりにあふれた重松描写は秀逸と称するほかはない。作者は、重松に対して、この悲惨事を語るものとしての唯一の資格はストイックな態度を保持する以外にないことを教えさとしていくとくである。いいかえれば、現代最高の酸鼻譚も生活者重松の目を通して描くほかないという、いわゆる井伏流八擲め手Vの方法意識が看取されるのである。原爆病という噂によって縁遠くなりかけた姪へ、痛切な「心の負担」を感じる主人公を創造して出発したとき、作者の内部には相当な自負が確認されていたのではなかったか。「姪の結婚」なる表題が、それを物語っている。

一方、こうした八擲め手Vの方法は、作品の結末部にもしくまれていたことが指摘できる。自身の「被爆日記」を熱心に浄書し続けた重松は、八月十五日の玉音放送の記述を最後にようやく全部の作業を完了させた。そして、翌日の午後には、小島村の生き残り原爆患者と共同経営している鯉の孵化池の様子を見に行くことになる。そこには、よく成育した養魚の群や池の片隅にうわっている蓴菜の花々があつた。(この自然描写は、前日完成したばかりの「被爆日記」の最後にあつた、用水溝の清冽な流れやそこを溯上するピリコと呼ばれる鱒の子、あたりに密生する杉苔、銭苔、水引草、ドクダミなどの群落、といったイメージの延長線上にある。)重松は、そこで、向うの山に目を移して、かなわぬこととは知りながらも悪化した矢須子の原爆病に奇蹟的な回復の起ることを占ってみるのだ。ところが、行数にして十行にみたないこの自然描出部分は、実は、初出誌にはまったくなかったもので、決定稿において新たに書き加えられた箇所なのであ

る。これまた、なにを意味するのだろうか。

端的にいえば、この自然イメージの付加作業も、さきの日時訂正問題同様、全体を書き終った段階で自覚された作品統一意志につきつごかされて、からくもつじつまをあわせるために添加された作者のあせりを物語っているのではあるまいか。つまり、悲惨な事実を八擲め手Vでとらえようとした当初の虚構意識が途中で崩壊し、放擲された残滓がこの部分なのだ。これまた、人何たる失策であることかVである。かといって、あともどりがきくものでもない。なかばはなりゆきにまかせて書き急ぎ、しかし書き終った時点で全体をながめわたしたときの不合理を補填しようがため、いわばそそくさとこの部分を付加してみたのであるにちがいない。「姪の結婚」という冒頭部の日常的などかさとも照応しているではないか、と自己弁明のことばも用意しながら。

いまかりに、冒頭部と結末部をひきくらべてみた。これを要するに、冒頭部で採用された八擲め手Vの方法を、途中で発生したなにかの八失策Vにもかかわらず、いやむしろそれが自覚されたがゆえに、結末部にも同じように付加させたこととくだ。たしかに、なにかが起つたに相違ない。そうするとすれば、必死の糊塗作業を必要とさせるうごきは、作品の前・後のみならず、中心部においても検証されなければならぬだろう。そのひとつは、主人公重松の意識が変化するうごきに顕現し、他のひとつは、全体の構成が変容していく現象にあらわれているとみてよいだろう。そして、これら、なにかが起つたと呼んできたものを、もはや小説としての変質と呼び換えてみるべきだろう。

「姪の結婚」という表現が象徴するように、作品の前半部までは、矢須子に対する重松の思いやりがきわめて濃密にでている。親がわりにあずかっているからといえはそれまでだが、「心の負担」を感じる感じかたは、ひとつの誠実さというよりときに過度なまでの責任感を思わせるものがある。

○僕は矢須子を娘ぶんとして預かって以上、この子に万一のことがあったては、シゲ子の両親に対して顔向けが出来ないのだ。矢須子を広島へ出て来させたのも僕に責任がある。若い女は田舎にいても都会にいても徴用で軍需工場の女工にされ、ハンマーを振りあげたり砲弾を削ったりする労働をさせられる。それで僕が古市工場に勤めているのを幸いに、ずるく立ちまわって矢須子を入

場の伝達係にするように工作したわけだ。(六)

○矢須子が原爆病にかかったのは、黒い雨に打られたためばかりでなく、まだ熱気のある焼跡の灰のなかを歩きまわったためもあるだろう。(中略) 匍匐前進するとき矢須子は左の肘を擦りむいた。その傷も死の灰の作用を受けなかったとは思われない。今さら云っても仕様がなないが、宇品の日本通運支店から強引に古市の工場へ辿ったのが拙かった。もし重松が支店長の杉村さんに頼んだら、矢須子を二日や三日は泊めてくれた筈である。その点、重松は責任を感じている。(十七)

これはあくまで「責任」感といったほどのものだろう。しかし、不可避の事だったとはいえ、その結果が彼女の悲劇を発生させたのである。適齡の彼女は、直接の被爆者という村の噂によって、縁遠くさせられている。それは無根のことで、事実は郊外で「黒い雨」にうたれて膚についた汚れがとれなかっただけにすぎないのだ。この無念さを知ったとき、もはや重松に感じられるのは単なる「責任」の問題ではなくなっていた。「心の負担」であり、「二重にも三重にも」の「負担」である。はじめに引いた冒頭部があかしだてている。

ところが、「負担」や「負担」の意識は、漸次うすらいでくる。入れかわって、「わしのヒストリーじゃ」(三)という意識が台頭する仕儀である。事情はこうだ。

縁遠かった矢須子に良縁がもたらされると、重松は、今までのあらぬ噂をかき消すために仲人に対して無根を証明しなければならぬと考える。姪思いのかれとしては当然のことだろう。

今度こそ矢須子の結婚を破談にさしてはいけないのだ。このごろ矢須子は今までとは見違えるほど色っぽさが増して来た。バセドー氏病ではないかと思われるほど目に艶も出た。実に水々しい。目につかないようにお洒落に工夫しているのがよく分る。矢須子が今度の縁談にどんなに乗り気になっているか、察しなくてはならぬのだ。(二)

そこで、あらゆる画策が弄される。ところが、ここから、作品は意外な(というの読者にとって)展開をとげだす。(原爆投下の日から小島村に帰るまでの矢須子の足どりを再現させるため、重松は彼女の日記(昭20・8・5-9)の清書をはじめた。(彼女よりもはるかに爆心地近くで被爆した重松が、原爆症であり

ながらも一応息災である。この事実は、矢須子の方がいっそう安全であることを間接に証明するのだから、彼女の日記の「附録篇」として重松自身の「被爆日記」(昭20・8・6-15)を清書しなければならなくなる。枝葉は拡がる。(「附録篇」のそのまた「附録篇」として、妻・シゲ子の「広島にて戦時下に於ける食生活」の手記が綴られる。さらには、矢須子の原爆後遺症が顕現してからのシゲ子によってなぐり書きされた「高丸矢須子病状日記」(昭25・7・25-30)を重松は清書する。そして、病床の矢須子をはげますために、(多重症のなからたちあがった、細川医院長の弟の書いた「広島被爆軍医予備員・岩竹博の手記」(昭20・7・1以降作品中の現時点まで)、さらに、(、(に付された岩竹夫人の回想速記録が追加される、というありさまである。

これらを作品の方法としてみれば、日記類の繙読・浄書という構造には、文字として定着された過去Vの事実がそういう行為を通じて仮構された現在Vにフラッシュバックされるということになる。原爆投下問題のすぐれた現在V的であるゆゑも、そうした、事実の持続性に帰因することを思うとき、この方法の有効性はじゅうぶんうべなわれる。ところが、小説としての世界はどうなるか。まず、虚構されたはずの世界における、この「事実V」性の横溢はどうだ。入したれども、これは、いっそ、井伏鱒二編「黒い雨」というべきだりまじょうがなVでもいっただあんなばいなのだ。

△事実Vの比重については、構成上から検索するのが便利である。まず、右に羅列した「事実V」の記述は、全体二十章に及ぶすべての章に象嵌されている。中心となる(口)の「被爆日記」は、五章から十五章でわがもの顔にせり出てきて、とりわけ、九章から十五章までは「日記」(昭20・8・7-13)がそのまま完全に作品である。全章の三分の一の比重をしめる。一方、矢須子の日記は最初の二章目まででたち消えになるため、「姪の結婚」という話題、つまり全体のストーリーリイとなるべきはずの世界が、細部にけちらされかき消されてゆく傾向を呈してくる。構成上の破綻といわれてきたもので、糾弾は発表当初からなされてきた。(はじめ、山本健吉、平野謙、日沼倫太郎氏などが簡単にふれ、のちに北村美憲、月村敏行氏が詳細に論じた)。

問題は、重松をしてそれほどもで「被爆日記」の浄書に熱中させるものがかたかというところだろう。私は、それを、かれの「ヒストリー」の意識にみたいたい

思う。日記の浄書は、はじめ、矢須子の無実を証明するために始められた。そうであつてみれば、「自家製の塩豆を齧りながら、夕飯を後まわしにして『被爆日記』を清書してい」(四)る重松が、「あんた、もう何時だと思ふんですか。よい加減にして夕飯をすまして遣わされ」と呼ばれるほどだったのも自然であり、結婚調査のために矢須子が晒しものにされることをふびんがって、「この上は、是が非でも『被爆日記』の清書を早く仕上げなくてはならぬ。(中略)意地でもそうしてはならないのだ。重松は自分自身の気持に追いつかれてしまつてゐることがわかつた。」(五)と急ぎ、相手の青年が仲人を介さず手紙を送つたのをはげみに感じて、尾道港住吉祭の「燈籠ながしも見に行かないで清書した。」(九)りしたのも当然といえる。けれども、終末部近く、矢須子が発病して縁談もこれ、日に衰弱しだした時点でもなお、重松の執心がさめやらないのはなぜなのか。さきに指摘した、五年目を迎える「八月六日の広島原爆追憶日」直前のところで「うだ、あと三日だ。筆記を急がねばならぬ」(十九)と夕飯もそこそこに、「重松は翌日まわして『被爆日記』の清書を仕上げた。」りしたのはどうしてなのか。もはや、矢須子への「負目」意識につきうごかされていぬことは明白である。

これが、重松特有の「ヒストリー」意識である。かれが、自分の日記を小学校の図書資料室へ寄付しようと考えていたことは、たまたま矢須子の日記の「附録篇」にとその清書を思いつく時点で示されている。「(仕事が)殖えてもよいわい。仕事を枝葉から枝葉へ殖やすのはわしの生れつきの性分じゃ。この被爆日記は、図書室へ納めるわしのヒストリーじゃ」(二)むろん、この時点では、矢須子のためにというさしせまった目的が先行していた。「ヒストリー」の意識は、二の次、三の次であつて、いつかは「どうせ清書せんければならん」と思つた程度だった。だから、「仕事を枝葉から枝葉へ殖やす」のは、字義どおり重松という架空の人物の性分にすぎなかつたわけだ。ところが、いつのまにか——ということとは、その性分が重松という登場人物のものだけでなく、かれを創造した作者その人のものでもあることが判明するあたりから、「ヒストリー」意識が前面へつんのめってくる。あれだけ姪を思ひやつたはずの誠実な男も、後半部あたりでは、姪とは無関係な浄書への熱心をみせて豹変するというぐあいである。

あきらかに、重松は変貌してくる。もともとをいえば、たしかに筆まめな、メモ癖ともいってよい性分があつた。自身で克明な日記をつけたり、図書室へ寄贈

する行為のなかにもじゅうぶんそれはうかがえる。が、浄書をペン書きにするか毛筆書きにするかを事実で徴して決着したり(三)、浄書中に「後日記」と称する追い書きを添加してあやまりの伝承をふせぎ(「後日記」は後半になるにしたがつて増加する)、被爆後の市中に貼りだされている布告(十四)や伝言(十三)をひき写してくるところ、郊外電車での体験談を総合して書きとめてい(八)ところ、被爆者の葬式を仕切るのに「故充田タカに関する記録」(十)という覚書きをしたり、「備忘録」(十三)を書きとめたりしているのは、いささか尋常の域を越えている。これらが、ヒストリアン・重松を支える下部条件なのだ。

ヒストリアン・重松は、はじめ、冷静であつた。なによりも、愛する姪のために人事実Vにたちむかつたのであるから。しかし、そうしたかれも、表面上の冷静さとはうってかわつて、人事実Vの探求を深めるにしたがつて思はず興奮してくるのだ。姪のためという冷静さも、日記の中に没入して人事実Vの探求者となると、自己の分際をうちわすれて入りびたってしまう。小説中の人物たる自己をふりきつて、探求者としての狂熱にとりつかれたとき、重松の面貌には作者・井伏鱒二のおもだちが二重映しにせせりだしてくるという仕儀なのだ。

作者の側からいっても、「原爆」という人事実Vを、牧歌的な日常で搦めとることを企図したとき、まず、こうした人事実Vの破天荒な世界を領略するには、さまざまな視点の集積、多数の見聞の累積という方法をもって臨むほかはないと考へていたにちがいない。事実、原爆投下瞬間の記述だけでも、さまざまなかたちで都合十三回ばかりも登場してくるほどである。いわば、記述の一面性を補強しているのだが、意識されたその方法が、限界をのり越えて人事実Vそのものに徹してくるとき、作者はなりふりかまわず重松にのりうつり、人事実Vの世界へひたすらのめり込んでくる。つまり、重松をつかさどるはずの作者も、重松自身になりかわつて人事実Vの世界の住人たることを肯んじたのである。日記の表出する人事実Vの世界は、それほど途方もない重さがあり、八握り手Vで制御するにはあまりの力があつたからにはかなるまい。

三

主人公の意識の変化や構成上の破綻をふくめて、作品の総体が変質してゆくに

は成立途上におけるうごきとも関係するものがあつたと思われる。つまり、結果からいえば、成立過程における一種の試行錯誤が、内質を変化させたというおもむきなのである。したがって以下では、変質の問題を、成立の背景といういわば作品の外部的な事情からさぐってみることにしたい。

作品外からの証言として、たとえば、作者のそば近くで「黒い雨」の誕生をみまもっていた新潮編集部菅原国雄氏の発言がある。

今でこそ云えるが、井伏さんは、初めからこれほどの本格的な原子爆弾の記録を書くつもりではなかった。だいいちこの小説は「姪の結婚」という題名で出された。「新潮」に約束された長編小説の締切が切迫しても適当な題材に恵まれなかった。やんごとなく心の中にくすぶっていた原子爆弾の周辺に筆をつけられたのであつた。かねて聞いていた重松さんの姪の悲話（縁遠かつたが無事に結婚して二人の子供まで産んでから原爆症が出て亡くなられた）を思い出しながらとにかく書きだされた。連載の二回目で、その姪御さんの日記を取りよせようとすると、重松さんから「見るも涙の種なので焼いた」という返事があつた。（『黒い雨』と井伏鱒二「新刊展望」昭和41・11・15）

氏の証言には、かりに、(1)作品の未生前の、原爆問題への関心、(2)執筆の動機、(3)執筆経過、の三契機がふくまれているとして、その順序で話をすすめてみよう。

まず、作者の原爆問題への姿勢はどうであつたか。菅原氏は、折につけて聞かされた作者の直話として「大震災も小説にならなかつたが、原子爆弾はもつとまらない」ということを紹介し、「出来れば、井伏さんは原子爆弾という題材をよけて通りたかつた。何としても、どぎつい題材は井伏さんの好むところではない。」と推定している。たしかに、この作家と「原爆」とはつながらない。それがつながつてできたところの一種の驚愕現象——「黒い雨」に対して私たちのもつていられない反応もそういう見取図をもつていただろう。だが、それはかならずしも正鵠をえていなかった。

作者は、さきに「かきつばた」(『中央公論』文芸特集、昭和26・6)という小品において、広島から四十里も離れた郷里の近くから、「原爆」を考えたことがあつた。「広島町の町が爆撃されて間もないころ、私は福山市近郊の知人のうちでカツバタの花の狂ひ咲きを見た。」と始まるその作品は、かきつばたの咲いている池のなかに、原爆で発狂自殺した娘の死体が、入水一週間後のある晩、浮きあがってくる話である。最初に現場を発見した主人公は、「思はず目を反らし、

電燈の明りを消した。窓もしめた。」のだが、そらした視界には、かきつばたの花や伊部焼の水甕の美しさがあしらわれていた。「どぎつい題材」は「よけて通る」べく、花や水甕との対照において、つまり作中の現在時の日常生活において「原爆」を掘めようとしていているけしきが濃厚である。「姪の結婚」という発想が、そういう人掘め手Vの延長線上に生まれてくることはここからも容易に予想できるところである。

また、「片割草紙」(『新潮』昭和38・8)という、一風変わった小品においても「どぎつい題材」とたちむかってみたことがあつた。これは、かねがね「書きそびれた材料を」「気分の上での身辺整理」のために「気になるやつから順序にノットにとって置かうと思つた」というものである。話材の提供者は、のち「黒い雨」の主人公となる「備後小島村の重松さん」だ。その当時、実在の人・重松静馬氏も「ちよつとでも無理な力仕事をすると、頭に小粒の発疹が出来て体がふらふらの状態になる。立ちくらみがするのと同じやうな容態になる。休養すると次第に恢復する。だから保養する必要がある。自分のある土地では遠慮だから、他の村の溜池へ保養の釣に出かけると、農繁期などには「結構な御身分すなわ」と皮肉を云はれることがあつたりして、原爆症や無理解な村人たちの反応に苦しめられていた。「黒い雨」の主人公たちは、「池本屋の小母はん」からにくまれ口をきかされたが、重松氏の方は道路工事人夫からだつた。「原爆病人には、つける薬がなかるまい。馬鹿には、つける薬がなかるまい。」「黒い雨」の牧歌的生活を色どる釣や養魚の発想がこと連続しているのはいうまでもない。また、「黒い雨」には、シゲ子と矢須子が河原で天浴中に仄聞する話として、広島城の五層の天守閣が、東南に向つてそのままの姿で数十メートル空中を飛んだ記録が挿入されている(十一)。出自はそのまま「片割草紙」に求められる。後日現場を見た重松氏が「天守閣は何千トンの重さがあるかじれません。その天守閣を、地球の引力より遙かに強い力で動かしたのです。引力よりも強い力ですから、瞬間、城を吸いあげたんでせうね」と感じたところを、「黒い雨」では「後で現場を見た人の話」となっているだけのちがひがある。

「黒い雨」未生前には、大略こつと考えてよいかたちで「原爆」への関心を処理していた、それを井伏文学のありようと考えてよいだらう。しかし、それが完全処理ではなく、「書きそびれ」「気になる」ものだったところに、作品成立の源点がある。

あったことになる。「井伏さんの書齋の片隅に、広島重松静馬さんの原爆体験記が積まれてから、もう何年ぐらいいなるだろう。井伏さんはそれが気になって、時々読みかけては又しまいこみ、いつの間にか埃をかぶっていた。」(菅原 国隆)

したがって、第二の問題は、執筆の動機にかかわるいきさつ、とくに、作中の「被爆日記」のもとになった手記がどのような経路をたどって作者の手に委ねられたかの事情を証言に徴してたしかめることである。ドキュメントを下敷にしたことは作者の公言によってもある程度知られていた。だが、そこへ直接的なかわりをもった、『原爆文献誌』(昭46・8)の著者・豊田清史氏の発言を加えてみると、委細はさらに明瞭な様相を呈してくるのである。

手記の提供者・重松静馬氏は、豊田氏とも同郷(広島県神石郡三和町字小島)の知人で、作品成立当時には六十歳の半ばを越え、孫の守りをしながら半百姓を営んでいた。単行本『黒い雨』の奥付に「小島村の諸つくり百姓、重松静馬」と自署するような人柄とある。井伏とも、疎開中以降親交のあることは「小島村の話」(昭29・10)「片割草紙」(昭83・8)などへ氏が実名で登場することから明らかである。戦時中の氏は、作中の主人公同様、広島市郊外安古市町の日本繊維会社古市工場(作中では「軍服の布地を製造」(十二)する工場)に勤務していて被爆されたのである。その事実を子孫へ伝える義務感から、氏は「昭和三十年頃までに四百字づつ原稿三百枚にのぼる手記を書きあげて、文箱にもっていた。」(豊田氏『原爆文献誌』)という。はじめ、手記を示された豊田氏は、そのうちの被爆当日を描写した部分を自身の主宰する短歌誌『火幻』(昭34・8)に掲載したものの、その作「かきつばた」を想起して井伏にゆだねることを示唆したという。豊田氏の伝える大概は以上である。原「黒い雨」ともいうべき、豊田氏によって顕字化された本文は、主人公が知人の高橋夫人ともども横川駅頭で被爆したくだりで、現行「黒い雨」の二、三章で重松によって浄書される「被爆日記」の冒頭に相当する。

かくして、作品は誕生してゆくのだが、作者自身、のちの感想として、「要するにこの作品は新聞の切抜、医者のカルテ、手記、記録、人の噂、速記、参考書、ノート、録音、などによって書いたものである。ルポルタージュのやうなものだから純粋な小説とは云はれない。」(「感想」群像、昭42・1)と述べたこと

がある。「純粋な小説」でないと感じるかたは主としてその書きかたをいったもので、「あんな前例のないことは、空想では書けない」(井伏鱒二・神保光太郎『黒い雨』その他)四季、昭44・7)という場合のそれと近似する。

だが、主人公として、現実の重松静馬氏を閉閣重松に変形させて出発したとき、作者の内部に虚構意識が貫流したのはあらそえまい。作中にあらわれる他の人物名や地名はほとんど実名そのまま用いられている。それに比べて、中軸たるべき主人公名を変形してゆく操作は、象徴的ですからあるだろう(たとえ、それが井伏特有の流儀だとしても)。「部分的には、また日常のことは、こさえた。」(同前)のたと述べる意識がそれである。

ここに、「材料の関係その他の事情で途中から改題」(「感想」)のやむなきにいたる事件が出来た。「はじめは、ある人の姪をモデルにした。」「その婦人の詳しい病床日記があった。それから、その婦人のかよった福山の医者が、その婦人のカルテが残っているということだった。」「序章のようなものを五十枚ばかり書いて、病床日記を送ってくれと言った。ところが、遺族が、あの日記は見るのも涙のタネだ、と燃してしまっていたさうだ。だから、どういうことが書いてあったかわからない。じゃあ、せめてカルテでも、と言ったら、カルテは患者が死んで三年経てば燃してもいいので、それも医者が燃してしまつたと言うさうだ。」「だから、書いていく途中に、病床日記がなくなったことがわかったので、運びの雲行きが変わつたんだ。あすこ、ちよつと不自然なところがある、と言つた人があるが、あるいはそうかもしれない。」(以上『黒い雨』その他)同時に、助け舟もあらわれた。「井伏さんが精魂を傾けると、人は思わぬところからすぐれた材料をタイミングよく寄せてくれた。爆心近くで被爆しながら蘇生された本所医師会長の岩竹さんに会えたのも、作品が後半になってからであった。」(菅原国隆『黒い雨』と井伏鱒二)

人から「敵前迂回したな」といわれたという改題も、すでにふれた小説の変質も、以上のような背後の事情が残した落し子にはかならない。

要するに、モデルを目前にすえて、当初、作者は、「姪の結婚」という構想で出発したのだった。姪の縁談について心労する虚構の中年夫婦を設定し、かれらの日常的な哀歓を描くことによって「原爆」を扱めとる予定であった。この作者にとつては自家薬籠中の手法であり、それをそのまま踏襲しても破綻はありえな

いはずであった。だが、予定はくるった。モデルとすべき「材料の関係その他の事情で」「運びの雲行きが変わっ」てきてしまったのだ。表題が変わった。主人公の意識や小説の構成も、したがってまた主題さえも変質をよぎなくされた。それのみでない。重要なのは、作者自身の志向が動きはじめたことで、いまや掬めとるべき「原爆」そのものへかれはつんのめつてきたのである。

そこで、第三の問題として指摘しうるのは、こうして変化しだした執筆途上の姿勢のうごきが作者自身のことばによっても幾分なぞりうることである。自己解説のことは思いのほか多いのだが、かれの気持は、つぎのような談話で集約しうるといってよいだろう。「はじめはそう長くしようとは思わなかった。聞いたり調べたりして書いているうちに、この重大さに気づいていったのである。当時、真相は自分たちに知らされていなかったし、自分もそんなに知らなかった。象をなでているうちに、鼻もあり耳もあるということを知っていったのだ。そういうところで、材料にひきずりまわされたという感じだ。」(NHKラジオ放送、昭41・12)「この重大さに気づいていった」というのは、調査し、執筆していく段階で「真面目になってきた。それは小説を書く直面目さとは違う真面目さです。」(「黒い雨」その他)四季、昭44・7)という態度をも意味するだろう。いわば作者は「姪の結婚」という小世界などあえて犠牲にしても、「黒い雨」をもたらしたものの実態を知り、それを証言してゆく「真面目さ」を体してきたのである。

「真面目」な探求者はあらゆる材料を渉猟しないではすまない。「クマ手で集めるように資料を集めました。」(「ブームの「実録文学」」読売新聞、昭42・2)そして、こうした努力のはてに、それを再現するのも、さまざまな視点の集積、多数の見聞の累積によって全貌を鳥瞰する以外に方法のありえないことを発見してきたのであった。

「広島のこと」のような大事件は文学作品の対象とするには巨大にすぎない。長篇大作でその全貌を捉へようとしても、また二作三作と重ねてみても手にあまる素材である。事件は前例のなかったことでもあり、突如として起ったことでもあり、しかも一瞬にして事態を決したことでもあるし、とても空想に頼って綴り得る対象でない。正確に書こうとすればするほど筆が洩る筈だ。被爆体験者にしても全貌は捉え難いのではないだろうか。たとえば前例の多かった長年

にわたる戦争にしても、来る日も来る日も大陸の奥地を行軍して終戦を迎えた兵隊は、「戦争とは絶域の地を果てしなく歩くことだ」という実感を持ったろう。サイパン島で洞穴を廻り続けた末に飢餓に倒れる兵隊は、「戦争とは絶海の孤島で穴廻りする兵卒を餓死させるものだ」という実感を持ったろう。体験の上から大事件について一個人の実感を語ろうとすれば見解が局部的になっってしまう。盲人が象を撫でるようなものである。繰返して云うが、その意味からして「広島のこと」のような言語に絶する悲惨な大事件は、たとえ体験者であっても一個人で書き得る対象とは云われまい。原爆小説を発表する良識的な一つの方法は、多数の体験者が各自の見聞を忠実に書き綴り、それを互に検討した上で一つにまとめて出版社に渡すことではないかと思う。それが最良の方法かどうかはともかくも、「原爆はもう御免だ。真相はこれだ」という思いを読者に訴えるには一つの方法だろう。(被爆を体験しない第三者が書く場合は、多数の体験者から取材するより他はないが、これは体験者から見れば上空で書いたような作品になるかもわからない。昇華が不足して、悪くしたらルポルタージュ風の雑文にしかならないのだ。私自身がその例証を持っていく) (井伏鱒二「はしがき」『八八月六日』を描く』昭45・6)

もはや紙頁を残さない、結論を急ごう。はじめ、作品の成立途上になにかが起ったことを予想した私は、そこに変質のさまを嗅ぎだしてきた。それは、「広島のこと」を「真面目」に考えだした作者にとってなにを意味するのだろうか。「姪の結婚」といった、日常的な小世界へちんまりと掬めとる方法では、とうてい問題の本質をとらえきれないということの発見となったのではあるまいか。ここで、井伏という作家は、いままでのような人掬め手Vの作品を完成させることより、そうした構想をのりこえてまで(あえていえば、それは犠牲にしても)「広島のこと」の重さを書きこんでゆく「真面目さ」を体得したのであるにちがいない。それは、現代の「人語部」たるべき自己の方途の発見であり、確認だったと称してもよいだろう。

かれの態度を、「述べて作らず」(山本健吉、読売新聞、昭41・8)というのはおそらく当たらない。小説未生のむかしの稗田阿礼は無私の立場を貫いたかも知れない。だが、現代の「人語部」は「広島のこと」を語らねばならない。かれに

はかれ流の新しい様式が必要となる。おそらく、現代は「私」をないがしろにできない時代だ。事実、この入語部Vの口調に注意をかたむけてみると、さりげないかたちでいかに痛烈なことが耳朶をうつつか。「戦争はいやだ。勝敗はどちらでもいい。早く済みさえすればいい。いわゆる正義の戦争より不正義の平和の方がいい。」「わしらは、国家のない国に生れたかったのう」(十一)等々。そういえば、作者自身、「ああいうことは、二三人で『史記』のようなテキパキした文章で、私のように『横あい』から書くのでなく、正面から書くといいのだ。」(NHKラジオ放送)と述懐したのも想起される。とにかく、こういう方向へ途を発見したことをかれの光栄といわなければならないと思う。だが、残念ながら、この作品自体を小説として肯定することそれは別のことだ。

注(1) なお、管見によれば、「黒い雨」に言及した諸文としてはつぎのようなものが数えられた。多くは好意的だが、北村美憲、月村敏行氏による否定論には示唆的なものがある。

▲作者の談話・感想類▼

井伏鱒二・河盛好蔵井伏文学について(中央公論社『日本の文学』月報、昭41・7)、井伏鱒二「作者の談話」(サンデー毎日、昭41・9)、井伏鱒二・河盛好蔵「『黒い雨』について」(NHKラジオ放送、昭41・12)、井伏鱒二「感想」(群像、昭42・1)、井伏鱒二・神保光太郎「『黒い雨』その他」(四季、昭44・7)、井伏鱒二「はしがき」(文化評論社『八八月六日』を描く、昭45・6)

▲言及文献▼

匿名「『黒い雨』のモデル、重松さん広島訪問」(読売新聞広島版、昭41・7) 北原武夫・佐伯彰一・野間宏「創作合評」(群像、昭41・8、ただし10月号発表) 江藤淳「文芸時評」(朝日新聞、昭41・8)、山本健吉「文芸時評」(読売新聞、昭41・8)、平野謙「九月の小説」(毎日新聞、昭41・8)、日野啓三「文芸時評」(週刊読書人、昭41・9)、山本健吉「現実に取り組む現代作家」(中国新聞、昭41・10) 中村真一郎「井伏鱒二 黒い雨」(昭41・11、初出誌不明、ただし「批評の暦」(昭46・10)所収)、菅原国隆「『黒い雨』と井伏鱒二」(新刊展望、昭41・11)、小山裕士「井伏鱒二氏の『黒い雨』を読んで」(週刊読書人、昭41・11)、北村美憲「井伏鱒二『黒い雨』論」(新日本文学、昭41・12)

日沼倫太郎「井伏鱒二著『黒い雨』」(図書新聞、昭41・12)、月村敏行「入原爆V文学の破綻—井伏鱒二『黒い雨』の勝利と敗北—」(日本読書新聞、昭41・12)「昭和四十一年度第十九回野間文芸賞に関する選評(石坂洋次郎「黒い雨」に感動す」、伊藤整「黒い雨について」、井上靖「青空を望む思ひ」、大岡昇平「黒い雨」、河上徹太郎「『黒い雨』讀」、川口松太郎「野間賞選評」、中島健蔵「野間賞」、中村光夫「『黒い雨』の独創」、丹羽文雄「感想」、舟橋聖一「『黒い雨』の受賞」)(群像、昭42・1)、古林尚「井伏鱒二の『黒い雨』」(文学的立場、昭42・1~10) 匿名「ブーム、実録の文学」(読売新聞、昭42・2)、匿名「事実と虚構」(朝日新聞、昭42・2)、相原和邦・磯貝英夫・上杉裕洋・寺橋武夫・浜本純逸・榎林滉二・松永信一「合評 井伏鱒二著『黒い雨』」(日本文学、昭42・4)、寺田透「『黒い雨』」(世界、昭42・7)、長岡弘芳「原爆関係文献案内—原爆文学史にそって—」(出版ニュース、昭43・8)、ジョン・ペスター訳「Black Rain」(講談社、昭44・2)、小沼丹「解説」(新潮日本文学17 井伏鱒二集、昭45・1)、開高健「紙の中の戦争—井伏鱒二『黒い雨』の場合—」(文学界、昭45・2)、河上徹太郎「解説」(新潮文庫「黒い雨」、昭45・6)、長岡弘芳「原爆文学通史」(芸文堂、昭45・11)、松本道介「現代の黙示録」(新潮、昭46・8)、豊田清史「原爆文獻誌」(審書房、昭46・8) 毎日新聞社「広島文学ノート この炎は消えず」(毎日新聞社、昭46・12) ジークフリート・シャルシュミット「『黒い雨』に示したドイツ出版社の反応」(波、昭47・1、2)

注(2) 初出題名「カキツバタ」。この作品でも、初出と決定稿のあいだには、日時に関する訂正箇所が認められる。

注(3) 毎日新聞社編『この炎は消えず(広島文学ノート)』によれば、『炎の記』(全三冊)と題されたこの手記は三百五十枚とある。なお、豊田氏の記載によると、表題は「炎の日」とあって異同がある。未詳。

注(4) 豊田氏の『原爆文獻誌』に『火幻』から転記されている原文は以下のようなものである。「八炎の日」と表題し、「重松静馬」の署名がある。

「電車の前三米のところでフラッシュ様の強烈な光球が眼に映じ、あとは真っ暗でどす黒いものに包まれた。／＼出る出る、降りる、痛い、キヤア」などの叫び声。悲鳴と共にどっと、中程から押しつけてきた。私は女の上にかぶさった。

女が悲鳴をあげた。人の腕ずくの間を押しつけて、やっとプラットホームに上ることができた。しかし、ここでも、何かにどっと突きあたった。柱らしかった。私は夢中でそれに抱きついて、懸命に振り切られまいとした。あたりが少し静かになった。眼をあけてみると、何時変ったのか、視界が薄茶色のモヤのようになり、成り遠く見える。柱の周囲には電線が幾十本もぶらさがって危険である。あれほど騒いだのにいまは人影一つない。こわごわ靴で電線を踏み動かしてみたが、ショートする気配がない。私は電線の交叉を避けて、押しわけながら、古枕木の柵を越えて構外に出た。民家も、横川神社も崩れさって、駅つづきの民家の地面は、一面瓦でふいたようになっていた。年頃の娘さんが上半身を出して、手当り次第に瓦を投げとばして救いを求め、突き差すような叫び声をあげている。どの男も女も、頭から灰をかぶり、血を流しておらぬものとはいいない。不意に阿鼻叫喚のそばから、「重松さん」とわが姓を呼ぶ声が耳をかすめた。そしてわが右腕を捕らえて、抱きつくように、「一會えてよかった！」と、高橋夫人がふるえながら言う。「原爆はどこでしょう？重松さん、あなたどこかで顔を打たれましたねエー」私の顔の皮がむけて、色が変わっているという。顔を撫でて、わが両掌をみると、青黒い紙捻状のものが一面に付着する。不思議に思っただけで、また撫でる。べっとりとつく。痛みはないが、気味悪く、ぞつとする。水を探がしてあたりを見まわす。あれほど多かった負傷者の群が、すっかりまばらである。人の逃げる方に気づくと、三滝公園と三篠の鉄橋にかけて、その鉄道路線は、さながら蟻の大群の行列だ。横川の小学校の校庭に防火用水タンクを見つけ、眼鏡をはずして顔を洗おうとすると、眼鏡も帽子もないことに気づいた。高橋さんは腰や肩を撫で「カバンが無い」と言い出した。「あの中に三千円の現金と、通帳・印鑑が入っていた」と言う。洗面して探しにゆくと言い張り、「お金よりも命が大切ですよ」と言ったが、もう爆発したのだから、爆撃はないだろうと、先に立ってどんどん構内へ道入っていった。布で繻帯せねばというので、高橋さんの言い通り三角巾で頭をくくった。今度は帽子がかむれぬ、ままと、一層のこと帽子を捨てた。気が清々した。私が家に帰ると言うのと、高橋さんは、帰らぬという。「私はお金をいただき銀行に払込まねばならぬから会社へ行く」と言う。銀行に人がいるかなと思案しながら、しきりと金と銀行が気になるらしい。こんなときも商魂に徹し切った人のすがたを、まざまざ

見てとる思いがした。横川駅前には火災だ。船にはばまれて通れそうもない。枕木がポロポロ燃えている。電柱もそうだ。油脂爆弾を落したに違いない。少し燃える火を踏み消して匂ってみたが、変ったにおいはない。不思議でならぬ。振りかえって見上げると、積乱雲でつくった巨大なクラゲが空中にふわっと浮いている。ムクムクと刻々に層をひろげて、北東に動いていく。見つめながら体が萎縮しそうだ。クラゲの脚はひろがって、すでに市内全体に襲来しそうだ。誰かが下の夕立らしいと言う。それもはっきりせぬ。市内全体に襲来したら、妻と姪を助けられるであろうか。クラゲの頭はますます拡大し、變い狂うてかぶさってくる。ドドドド地表面がふるえ、大黒煙が中央に噴き上げられてゆく。誰一人ものを言うものもおらぬ。貨車の下水面はころげた玉葱でかぶさっている。鉄橋を渡った者は二葉の里から山へと登っている。山腹が燃えているのに、山火事になったら危険千万なのに、群集はどんどん火の方向へ登って行く。人の波は山へ山へと雪崩れてゆく思いだ。我が子の手を引いていると思つたのは、それはまその子で、振り切るとこの子は、「おばちゃん、おばちゃん」と連呼して、一人の婦人を追いかけて行った。人々の狂い動く間を縫って、私はやつのこと、放心したように口をあけて、崩れている広島駅へたどりついた。